

---

 書 評 ・ 紹 介
 

---

中谷文美著

『オランダ流ワーク・ライフ・バランス』  
「人生のラッシュアワー」を生き抜く人々の技法

世界思想社, 2015年1月, 248p.

女性就業の拡大が時代の要請となりつつあり、ワークライフバランスを巡る議論が一層盛んである。諸外国を見渡すと、わが国と同じように性別役割分業規範が強固な社会でありながら、労働生産性と国民の幸福度を非常に高い水準で両立している国がある。オランダである。2013年におけるオランダの時間当たり労働生産性は、OECD34カ国中6位（日本は20位）、国連『世界幸福度報告書2016』による国民の幸福度は157カ国中7位（日本は53位）である。本書によれば、オランダは、ユニセフによる先進国の子どもの幸福度では21カ国中1位、12歳以上の国民の約9割が「とても幸せである」もしくは「幸せである」と回答するというのだから驚きだ。ちなみに2014年のオランダの合計特殊出生率は1.78（日本は1.42）。オランダにあって、日本にないものは何か？21世紀における日本の家族やワークライフバランスを考えるにあたって、オランダの事例を参考にしてみたいと考える研究者や実務担当者は多いはずだ。

オランダが「ワークシェアリング」の国であることはよく知られているが、その制度の詳細や政策的な変遷、働き方の変化に伴う人々の生活の変化、あるいはその先進的なワークスタイルを実践する人々の意識やお国柄など、いざオランダについて知ろうとすると、意外とどこから手を付けて良いか分からない。そんな読者にはぜひ本書を手にとって欲しい。本書は、「パートタイム王国」として知られるオランダのワークライフバランスに関する政策、歴史、そしてインタビューを通じた人々の意識や実態に迫る一冊であり、上記のような関心をもつ読者の入門書としても最適な一冊であるといえる。例えば、オランダの「働き方改革」の動機や政策の変遷がよく分かる。とりわけ政策については、2010年以降の直近における展開までフォローされているので有用である。オランダにおける労働や生活時間の変遷に関する各種統計も豊富で分かりやすい。また、オランダ語のメディアや文献からの引用が多数ある点も貴重である。

著者は、社会における「仕事」をめぐる考え方や実践を研究する文化人類学者である。本書における制度・政策の変遷や統計によるレビューは貴重な情報源であるが、本書の真骨頂は、むしろインタビューや現地での生活を通じて得られた実感をもとに、オランダの人々が仕事や家庭内におけるケア（家事・育児）に対して、どのような考えをもっているのかに肉薄している点であろう。とりわけ、オランダの人々は家庭で家族や友人と過ごす時間を重視しており、女性は「たとえ保育所がタダになっても、子どもを預けっぱなしにしたりはしないし、今より長く働いたりする気もない」といった気概をもっていることなどは、フィールドワークならではの貴重な知見だろう。

本書では、オランダにおける人々の満足度の高さは、個人が自己のライフスタイルを実現するために、仕事とプライベートあるいはプライベートにおけるケア負担について、望ましい組み合わせを「自由に選択できる」ことによると分析されている。また、個人の望むライフスタイルを実現する上で、様々な資源を「組み合わせる」ことが重要であるという意識が広く共有され、政策もその意識に

沿ったものであることがオランダの特徴であるという。フルタイムとパートタイムの均等処遇が保障され、個人の事情による就労時間の変更が認められるオランダでは、パートタイム就労は長らく家庭に閉じ込められていた女性が「獲得した権利」として認識されている。男性はフルタイムでの就業が一般的であるのに対し、多くの女性はこの「権利」を行使しつつ、家事や育児などのケア活動になお多くの時間を割いている。これを自由な選択の結果であるとみるか、社会におけるジェンダーバイアスとみるかは、オランダでも意見が分かれるとのことであるが、男女が同じように働くことのみが人々の幸福度を高めるのではないという視点は重要である。

(福田節也)